長州藩天保一揆に関する若干の史料

北川　健

Ⅰ　山口近郊の百姓中請状――文政末農民状況の一端
Ⅱ　直横目の探索報告書――天保元年一揆の様相
Ⅲ　隠密の探察報告書――天保全藩一揆の概観
Ⅳ　山口町での風聞記録――天保百姓一揆の実況
Ⅴ　萩城下の投書と落書――藩政批判と世相風刺

長州藩天保一揆に関する基本的な史料については、つとに田中彰氏による紹介（田中彰「長州藩天保二年一揆の若干の史料」〈『山口県地方史研究』八号〉）がなされており、加えて一揆の輪廓、基本的な性格についても、そこで明きらかにされている。したがって、小稿は屋上屋を重ねるきらいをおそれるものであるが、従来ほとんど明きらかでなかった天保元年一揆の様相、それに全藩一揆を契機としての政治批判、そのほかこれまで広く知られること

との少なかった史料のいくつかについて紹介しておきたい。

Ⅰ　山口近郊の百姓中請状――文政末農民状況の一端

長州藩天保二年の全藩一揆は、農民的商品経済へのいわゆる領主的統制の強化（化政期を頂点とする）に対する闘争として広汎な広がりをもった。史料(1)は、文政末期、領主的統制＝専売制の強化に対して、「直段下直ニ〆御買上被仰付候故下差問之由」と「申触」れ歩く者がいたこと、また農民が米の「抜売」をし、手元米の自由販売を求めていたことを示す。山口宰判赤妻村の庄屋岩本宗兵衛の「御書附其外廉有ル御沙汰物並請状ひかへ」による。

(1)　赤妻村百姓中請状

御請申上候事

御国中産物出来之分御買上被仰付候処間ニ不心得之者有之直段下直ニ〆御買上被仰付候故下差問之由申触候者も有之様相聞甚以御心外ニ被思召候全於上ニ不直之儀ハ無之事ニ候条御趣意筋得と勘弁仕此上なから何そ御益筋ニ相当り候産物致出来候ハヽ相応之直段ニ〆御買上可被仰付乍併問筋有之段申出候ハヽ何分之御詮儀可被仰付との御事奉得其旨候事

一米売買之儀ハ御年貢方御皆済迄被差留皆済後迄も他郡売等ハ堅御制候段御大法之所間ニ抜売等仕候ニ付厳敷御詮儀被仰付以近年持運ひ候節津留打廻り方被見咎現米御取上其上本人御咎をも被仰付候ニ付ゐハ第一御代官所御制道も不行届道理相当り甚以不相済事ニ候然処当秋之儀一統順作と相聞候間御皆済不相成内迄も早皆済仕候者之儀ハ地下御役座御見渡を以差懸り肥代米頼母師懸銭等差問有之分ハ御心入を以其時ニ相場を以御買上可被仰付との御事奉承知候然上は於地下差問無之事ニ付全抜売等不仕相互ニ気を付合可申候自然右躰不心得之者有之御見咎ニ逢候者御座候ハヽ本人ハ不及申組相迄も越度可被仰付との御事奉得其旨候事

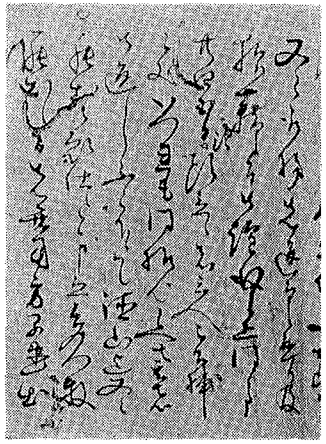
一御皆済を過候迄も他郡売不相成段被仰渡奉得其旨候事右之通廉ニ被仰渡謹ゐ奉得其旨候仍ゐ連判を以御受状仕差上申候処如件

文政十二丑十月　　惣百姓中（以下、百姓名省略）

Ⅱ　直横目の探索報告書――天保元年一揆の様相

天保元年（文政十三）、内海地帯の田布施、浅江村に起こり、さらに徳山領へと押し出た一揆は、「国産御内用事」＝専売制への反対要求を標榜していることにおいて、翌天保二年全藩一揆の原型、前兆をなす。この天保元年一揆については、従来、「御当職所日記」と「草舎年表」によって知れるのみであったが、このほど毛利家文庫「遠用物」史料群のなかから見出された史料(5)と、光市史編纂事業の過程で旧光井村玉泉寺から発見された史料(4)によって、一揆の具体的な様相が明きらかとなった。

ことに史料(5)は、一揆後、現地に派遣された直横目の探索報告書とおぼしきもので、これによれば、一揆は浅江川口での酒の積み出し阻止騒動を契機に計画され、徳山領までの大衆行動も、戦術として策謀されたものであったことがわかる。その後も現地では、数次にわたって一揆続発の情勢が継続しており、農民側の動向に役所側が翻弄されているかの観さえうかがえる。



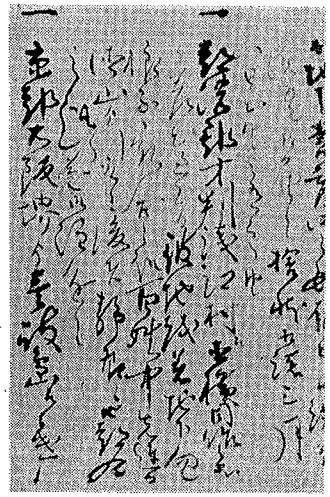
浅江村一揆探索報知書（部分）
逮捕者の釈放を要求しての第二次の一揆。

(2)　御当職所日記

（文政十三年）七月晦日曇

一都濃郡才判浅江村百姓熊毛才判島田村百姓多人数萩御城拝見と唱徳山御領遠石迄出掛候を彼御領役人衆出張

差留候之段早使を以申越候由御屋舗用達人罷出相達候
間早速蔵主殿申上相成両才判御代官衆呼出シ旨趣相達
出役之事等詮儀様相成候
一昨廿九日早朝ゟ三百人余地下立出之様子こ付近村地下
役人其外頭立之者共相究候役人衆手子勘場役人等色ゝ
申論途中迄も追掛段ゝ相究候得共終こ徳山御領迄罷出
候処彼御領役人出張こて申論漸折相同夜浅江引取候之
由委細は御届こ罷出候得共一応及御届置候之由伊藤弥
一右衛門ゟ申出候酒又徳山ゟは島田村百姓も立出候由
達有之候へ共彼村之者ハ無之候之由こ付其段長嶺嘉右



御当職所日記

天保元年浅江村一揆に際して
直横目の現地派遣。

衛門ハは申達候由をも相届候
八月八日雨昼ゟ霽
一都濃郡才判浅江村ハ直横目作兵衛被差出過五日彼地越
着地下向之様子承合候処百姓中先達ゟ徳山ゟ引受之後
は静居候由都合之趣遂御注進候

(3) **草舎年表**

(文政十三年)八月三日

上ノ関才判田ふせ村浅内(ママ)熊毛才判浅内村津野(ママ)郡才判室
積村国産御内用事こ付一揆起り其勢八百人程萩表罷懸
候処徳山こて御人数被差出御差止メ萩表ハ即刻御家老
被差出御扱ひこて事治る

(4) **岩崎家年代記**

熊毛百姓川西辺ノ者萩ハ願の筋有之候と申出懸ケ候処室
積の御番所様当村へ出張有之御とめ被成候事下松屋吉左
衛門方立やどこ相成百姓へむすび御地走相成候事
嶋田村百姓萩ハ願之筋有之と申出懸ケ候処徳山様御家中

徳山町こて御とめ被成是又むすひこて地走有之戻る其後
百姓段ゝ召とられろう行有之閉戸有之候事
当所国本屋酒場高森戎屋正兵衛と申者預ケ居川畑柏屋勝
五郎と申者有之其家へ嶋田市酒場平川源之丞様被成候ゟ
其酒柏屋勝五郎迄出預ケられ候処地下百姓中行樽をめぎ
くみ呑にし戻り懸り国本やハは立寄売場をめぎ石をなげ火
をけし地下役人衆出張相成候得共不宜分売場の金銀迄ゟ
少ゝ庄兵衛家内の者立にげ候故取者有之其後御詮儀之上
東組畔頭久保平右衛門組百姓林蔵男子勘右衛門長尾ノ市
五郎寺後ノ惣右衛門広ノ下ノ藤蔵川畑ノかじや清右衛門
閉戸之事西組常右衛門追込其外こ段ゝ有之川ばた柏屋勝
五郎閉戸之事
光井百姓中光立寺のかねをつき是又願の筋有之と申市川
の房吉と申者山代ノろうハ入
其外段ゝ村ゝこ前文之通り有之
此一二三年の間書つくされず略之

(5) **浅江村一揆探索報知書**

都濃郡浅江村
家数四百八拾七軒位
人数弐千百六拾人位男女
現高弐千九百六拾七石壱斗壱升六合
内弐千五百拾石四斗八升四合田高
四百五拾六石六斗三升弐合畠高
受紙九拾壱丸弐〆
御仕入丸別米壱石宛　御本勘立
銀六匁八分宛　同断
外米壱斗七合位丸別
但修甫方預ケ米利払凡六朱利
以上

先庄屋
田村久左衛門

右身元上関こゐ貫田武右衛門方こゐ養父ハ茂吉と申大庄
屋をも相勤家柄之者之由、久左衛門事当年凡三十歳位こ
て十四五ケ年已前庄屋役被仰付其砌ハ茂吉後見仕候由頓
こ相果久左衛事是迄ハ地下向強ゐ何かと申程之儀ハ無之
候へとも元来気先之荒キ生質こゐ地下之者何そ申入候事

有之候ゟも強キ事申荒く突懸り之気方候故受心宜敷と申こて無之地下向之事先ハ入込して世話仕遣し不申気味之由手跡も十分無之諸算用事も不取〆り之気味こて庄屋元畔頭座之取遣算用等畔頭ゟ追ミ引合之儀申入候ゟも何カと申期延こ相成滞り勝こ付畔頭こおゐて銘ミ之受払取〆り仕置候のミこて兼ゟ之気質故と強て取合不申趣こゟ庄屋畔頭之間こは格別之儀ハ無之趣之由

一百姓中ゟ難渋之廉ミ御庄屋元へ願出候ゟも御取上無御座と申儀ハ前断之気前故之儀と相聞勿論願筋有之候ハヽ順ミ可申出事候へ共必左様こ仕たるこても無之趣こゟ仮令畔頭ゟ申候とても先割付て置と申様之事カと相聞夫故前断之通申出候趣と相聞候

一川除御普請井手関之時節後れ候こて此段ハ無調法と考居候由地下役所へ御立山杭柵もらひ候様地下人申候へ共前ミ左様之事無之由

一溝手さらへの儀ハ早ミ仕候ゟハ水取時節迄こはすべり落埋り候ゟ又ミ浚之時ハ人力費も有之故肝要之時節こて其訳百生中へ入割申聞せ候へハ十口申事ハ無之儀是併不世話成ゟと申こ成候ては申訳無之哉こ相見候趣こ相聞候

一去秋騒動之一儀こ付ゟハ其後庄屋役も代り勘場大庄屋元加勢と申銘目こゟ罷居候へ共実ハ加勢こも被遣候人柄こて無之まして庄屋役とも申人にてハ無之候へ共於地下家柄と申計之事にて壮年より相勤候趣之由

一後役堀三左衛門と申者算用師ゟ兼帯こて相勤候処当節御勘場こ出萩仕候由庄屋元諸算用仕法事早ミ相済せ度と久左衛門ゟ度ミ申合猶又萩ゟも書状差越趣こ候へ共久左衛門素不勘定なる者故何角とすり抜今こも仕向も不仕由右躰之儀こ付地下諸貫買別上納等之儀仕詰見候て却ゟ久左衛門損毛共ハ可有之と申程之事候由

一騒動起り候節久左衛門伯父こ相当り候安田往人こゟ三丘之中臣通り竹屋勘兵衛と申仁并塩田こ居候井上彦左衛門養父養兄　世悴大庄屋又左衛門此両人早速出萩御代官へ御頼入仕候由

以上

（後筆）「地下中へ入」

一近年検見之儀願候ゟも御取上無之と申次第ハ一躰近年之毛上ハ自分ノ田ヲ自分見損ひ候位之事こて本ゟ人の見候処尤筋こ無之候ゟハ検見こ被出物こて無之候処至混納取見無之故無理こ押付られ候様こも思ひ候と相見へ候てハ浅江こても限り不申由然処去年ハ検見も可有之決ゟ浅江は六ツカ敷可有之と心得居候処思之外少く終こ仕揚こ至り候ゟハ大迷惑仕候者も有之由是ハ自身も見人こも見せ候ゟ尤至極こ至り申出候様こ有之度と先達ゟ示し付られ己と思ひ候趣こ候処ヤハリ己等見そこなひ一言半句も得言不申候由

地下中

一去寅七月十三日酒を留候主意ハ近年米高直こ連酒直段も高く相成候是偏こ他所へ積出し候ゟ之事こて是を相支り留候へハ自然と下直成酒を呑候と申者も実事ハ浅はか成思ひ付こて酒屋ハ呼坂川尻安田小周防三井と〆五ケ所ゟ舟催合こて他所へ積出し候由然処右留候ハ浅江市之者計こて候由取揚候ゟは其場こて口を明飲候者も有之或ハ往来之人こも無理に飲せ又ハ樽を取隠しなと様ミ狼藉仕候由右こ付御代官所ゟ御詮儀有之以来狼藉不仕様御示し方相成呑れ損こ〆残る酒ヲハ積出仕候由此砌升別壱分直下ケ仕候由

左候処七月廿九日徳山まて凡三百人程荷俵叺なと負竹杖又ハ鎌なと銘ミ持候ゟ出掛候次第こおの〳〵ハ主意ハ別こ発頭人有之表通り願立之廉ミ於勘場こ一通り御詮儀相成候由こ候へ共廉ミ尤之筋も申儀も無之殊こ多人数申合せ候とハ乍申実ハ銘ミ区ミ之事かと相聞へ既こ出立之節鯨を挙候へ共平原木園川口なとハ其訳も不存位之事候由行懸り〳〵徳山迄願こ不出者ハ揚り候上ハ打潰し候之何のと申こ恐れ無拠訳ハ不知出候ゟ其内こ半途より帰り候者も有之たる様之事之由左候ゟ願出之趣詮儀之上久左衛門をハ勘場内ミ入替之心こ被仰付米計ハ被差替別人地下望之者を被差出候由然処酒積出こ付ゟハ熊毛方へ通達も相成たる趣候処酒屋中意味違こゟ試こ少ミ出し懸見可申と申合候趣こて積出仕候処九月中頃か又ミ取揚先達ゟ之通り及狼藉こ付御詮儀之上同月廿四五日頃頭立候者三人被召捕候処いつれも同様こて候へは其者御返し不被下候ハヽ徳山迄又ミ罷出

御願仕候と申立多人数罷出候付先算用方早速出張徳山ゟも役人出張相成候由こて下松於西教寺こ頭立之者召出し御算用方ゟ入割申聞相成候処十口之申訳不得仕候由こて引取其後廿七八日頃又ミ諷立候やう相聞へ御代官御出張相成候処強ゐ出懸候こても無之こ付浅江迄御越地下中へ受状被仰付夫已来ハ都合相替儀も無之先は相鎮り居候由

一春向作付飯と申ハ暮分御貸米同様こは不被仰付物こ候を同し心こ思ひ居候哉こて候得共久左衛門事実情地下之世話仕心底こて候へハ入わり可相諭又秋入替米ハ小百姓共入替候御作法こても無之是等ハ畔頭共取計振こ寄可申猶又庄屋ゟも合点行候様諭し候て可申立筋こてハ無之儀と相聞候

一御買上米間銀を貫候次第ハ去ミ丑暮御買米を以大坂御運送被仰付候段御沙汰相成諸村割符之内浅江村ゟは六拾六石程之所地下こゐ売米無之こ付御本勘ゟ御撫育方へ御渡米室積へ払候分大かたハ例年室積御売直段代銀を以室積納メ候付去ミ年も御撫育米壱石こ付正銀六拾八匁位こて買取算用別記こアリ上納相済せ御本勘ゟハ南御買直段を以代銀被差下候付右質銀之出所無之尤於村ミ少ミ之不同ハ有之候へ共いつれも都合同様之事こ付於勘場諸村申合之上石高割こ〆貫立仕候由尤秋貫こ〆ハ夫迄こ利も懸り且相場相こてハ余分地下之迷惑こ相成候こ付夏貫キこ仕候由行詰候ゐハ地下仕合之趣こ相聞候、熊毛才判こゐハ豪家之者受負候ゐ御買和市とを何かなと申立候訳と相聞候

一否所不起下受夫飯米員数百姓へ被仰渡度と申儀も何そ庄屋之手前利徳を得候哉之疑心こて是等之儀も兼ゐ之世話ふりゟ起り候儀と相聞候

一畔頭五人共被差代候様にと申儀格別地下気受不宜と申程之事も無之候得とも主意別段こて庄屋へ相添申立候儀と相聞候

一御用之外穀物酒薪等川口出津留候儀ハ近来穀類其外高値故申立候儀と相聞候へ共村内こゐも山寄せ之所ハ薪出津不仕ゐハ間有之申立候筋ハ無之川口之者ハ諸物之出入有之候へは荷役も有之渡世こ相成候付被差留候儀不相好然は一村申合候様こ相見候ゐも於内輪銘ミ所ミこゐ違却有之一統之願と申こ成候ゐハ申分不詰りと相聞候

一酒造ハ在方ハ必御定石計も造り不申いつれも同様之儀余分作り候へハ下直之酒も有之且白水粕等之肥も多キ筋こ当り必一概こも難申訳立かね候由申分之由

一諸懸り物多分こ相成難儀仕候との儀於此段勘場諸村共一躰近年小貫太ク候付可成たけハ減し候様有之度と内ミ申合も仕候由都濃郡中ハカマゲ貫と申事無之小貫こて相済候由尤何こよらす小貫へ打込候ゐ一勘定及不足候へハ後勘こて差引又余り候へハ後勘を少く仕候様こ〆右出入こ利を懸候ゐ取候儀共ハ不入事抔申候ゐ止させ度と申合たる事も有之人馬之送り役へ当ル貫キも度ミ取替払之分利を付ゐ取候抔ハ不宜彼是詮儀仕度一躰ハ前ミゟハ諸事たまり夫ハ地下之者共申ハ余儀も無之事こ候へとも時之行懸りハ其筋こも不取参と申が勘場庄屋之心持と相聞候諸村共小貫之差引受払之次第一ミ入用之廉地下之者へ算用合点之行候様見せ候が宜敷夫なれハ疑ハ少も無之何程入ふと結句仕よいと申訳之由才判之内切山村計ハ人気不宜所こて此村にハ証人百生頭百生寄合足役平均仕候由其外ハカマケも足役ならしも無之由

但本文之通之所ガラハ所手モ何も甘ミハ少キ所ナランカ

一勘場入目と云も右こ準す尤先算櫛新ハ酒一向不用塵も灰も付不申大舎官ハ過る御好しかも長唄其上に不慮之御咄も有之算州と甚不合候て有之たるよし算州ハ倹を用て勘場を至て取〆られ候よし

一井手用水溝手崩とめ切土手等之儀其所を引受之者計之由尤此人柄我儘共申かねぬ者之由こ風聞仕候将又右大豆をハ釣ばん升こて量候様と申儀ハ元来土貢大豆と申シ斗延（トノビ）入足等有之土貢米と同様之物こ候処畠高壱石こ付弐升之当り故人こより壱弐合又ハ五六合或ハ壱弐升三四升と量取候ゐ計升用ひ候程之上納は無之因之先年諸村申談之上土貢壱升入之箱を調へ是を以受払共相用来り尤村こ寄候ゐ本升こゐ取候へハ壱升之所ハ壱升一

合三勺又ハ所こより少ゝ取方相替儀も有之候へ共いつれ土貢之算用こ詰候ゑ之儀畔頭別自身手元こ取立候も有之御蔵こて取立候も有之所ゝ之流例こゑ候地下和市と之相欠儲こ可相成と見込候趣之処暮ゑ春ゑ懸余分相場高直こ成損毛仕候へ共是ハ受負人有之事故地下へ懸不申候由南御買和市こてハ年こより下之徳こ相成候事も有之由

一米計様無理仕候と申儀ハ無之候へ共畔頭吉右衛門と申者内証不手前之方故世悴を米量名目こゞ実ハ吉左衛門相勤候由収納取方は（註）〔浅江ハコスリ計〕村ゝ古来行形有之候処不考を以何かと申立候も実ハ吉左衛門事収納候節数度呼こ行不申候ゑハ量り庭へ出不申様事も有之彼是故申立候趣こゑ地下中ゑ望之人柄へ申付相成候申分こて一統へ懸りたる事こて無之候へ共庄屋不世話ゑ何角と申立候段無念之至りこ相成候よし是ハ地下尤こ相聞候

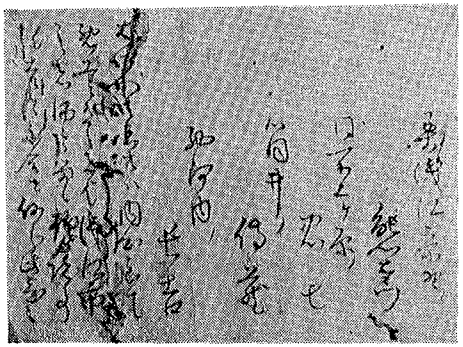
一見取紙根受浅江村之分九十壱丸弐〆御仕入米九拾壱石三斗余銀六百目余外こ修甫方預米利九石余有之右こ付嘉吉と申もの受負こて紙買集候由之処此者所躰薄く自身之年貢立用抔仕候事所全仕詰不埒こ相成候付夫ゝ止させ庄屋手前こて米うり捌買寄仕候付利徳を得を心付たる儀と相聞候処一躰ハ諸村之内こて三井浅江は紋合低くて相済所柄候由右こ付ゑハ実ハ受紙之者御仕入を渡し切銭にても世話仕候者へ打任せ候ゑ訳ハ不知して却ゑ仕合之道理こ当り候位之事故受紙有之者ゑ申立候儀こてハ無之嘉吉事悪者なる故自身之勝手へ来ぬ儀こ付一返之申立と相聞へ候

一御通路人馬近年多候付ゑハ賃飯米等之割符太く相成迷惑こ付向後ハ銘ゝ無賃こて現送り仕度と申儀兎角不遣人馬之賃を貰候かと之疑と相聞候依之成程其通こ可被仰付乍所能勘弁仕見候へ九州御大名公儀御役人其外時ゝ刻ゝ之儀現人可罷出と申候ゑも其度ゝふれ廻り出候様こは相成間敷且延引又ハ火急之事有之間こ合不申節ハいかゝ仕候哉作方之妨こ成候儀も可有之尤望之事こゑ候へハ其通仕可然申候へハ十口無之由

右廉ゝ申立之趣こ付ゑハ小百姓ゑ十人頭申合夫ゑ尤之筋をこそ可相歎候所左様こ彼是絶候訳こて無之申立筋御詮儀被仰付と申こ成候ゑハ取も不留事こ成素より比主意（虫喰）〔　〕申こて無之上べの付事之様こて必久左衛門畔中と常ゝ不折合と申訳も無之至此節候ゑハ相鎮り居いつれ御詮義被仰付候て可有之か久左衛門をハ本之通りこ御返し被成候なとゝ噂も仕候由且久左衛門勘場へ被成御遣候と申儀否なとゝ申者無之様相聞全躰発頭之者共之進口へ付候趣にて実情難渋ゑ発り候筋ハ無之元来人気不宜所柄無訳騒動仕候趣こ相聞候

西河内こ居候
弥吉

右居宅西河内にて近来徳山領久保市二ノ瀬と申所酒場を預り手代を置自身往来仕留守をハ悴文左衛門世話仕相応之御百生仕候由弥吉事八九年已前畔頭役勤候節同役内年数少キ（処カ）〔　〕苗字被差免尤其者給庄屋兼帯之勤切故何卒給庄屋株兼（カネサ）せ呉候様久左衛門へ申入候へ共取合不申こ付夫を憤り退役仕候由生質至ゑ不宜者こて根元此憤を根こ持居候趣こゑ村内熊右衛門忠七伝蔵長吉抔と申者ハ表向と違内心悪工ゝ有之者共こ付庄屋元之都合ハ能存知居彼是故常ゝ右等之者共へ疑心を狭ゝ候様悪智恵付候趣哉こて候処折節積出酒差留候一儀出来尤此儀庄屋役筋へ不相拘事こ候得ともか様之企仕候者有之を幸こ右四人之者共弥吉へ及密談候趣と相聞弥吉内存こは兼ゑ申合候疑心之廉ゝ申立させ及騒働候得はいつれ庄屋役被差替之外無之然時は村内こてハ自身外可相勤者無之こ付自然と庄屋役を可相勤と深く工ミ候より全表へは不相顕種ゝと蔭より腰押仕候趣こゑ発頭第一之者と風聞仕候趣こ相聞候



浅江村一揆探索報知書
一揆の主謀者の名をあげている。

奥浅江京野ノ　熊右衛門
同所上ケ原ノ　忠七
筒井ノ　伝蔵
西河内ノ　長吉

右四人之者共ハ内心至て悪工ミ有之者こて浅江市之者酒を留候砌ゟ諸事弥吉と示合せ何分此度之一儀勘場ゟ申出候位之事こてハとても及尊上候儀こて無之こ付徳山迄出候へハ是非御留可被成其節彼地にて申上候へハ萩表へ御達しも可相成儀こ付萩へ出候と申ハ表通りこて内存ハ徳山迄と申合たる趣こゐ此者共重モに地下中を進め立候趣こ相聞候

山王原ノ　嘉吉
佐内ノ　甚吉

右両人ハ兼ゐ人柄不宜者こて前断四人へ差次彼是世話仕候由相聞候

Ⅲ　隠密の探察報告書――天保全藩一揆の概観

天保二年の百姓一揆に直面して、藩当局は多数の隠密を派遣、藩内情勢の探察にあてた。史料(6)は、そのうちの一人による探察報告書とでも云うべきもの。底本は大正五年ころ山口図書館による筆写と目される写本であるが、原本は不明。

これによれば、吉田・船木・新地一帯では、一揆勢は「凡十三万弐千百人」に及んだとされ、「百姓共を呼集め相勢之人数を指揮」する「浪人」の存在が告げられている。また、農民側は「富産物方」の停廃、大庄屋の廃止などを要求。この一揆勢に対して「重役衆ハ全具足を持せ出張」し、「鉄炮」と「切捨」の武力鎮圧を企図した領主側の姿勢もうかがえる。一方、藩庁には、「近国皆ミ」から「使者」が到来。一般にも、「大坂陣已来之大騒動」と受けとめられている。

史料(7)は、岩国領吉川家の記録。岩国徴古館所蔵。

(6)　長州騒動書附

天保二年辛卯秋長州百姓一揆相催し大騒動に相成御隣国迄も御手当御人出有之其節極密之忍にて所ミへ外聞之衆多人数御当国よりも被差出浦辺島方へ御出之御日記御上へ被差上候分御懇意被成候ハヽ御方様よりひそかに一夜拝借いたし急速こ写し置候ゆへ見苦敷談廉ミ所ミも有之候故後日改可申事

卯十二月廿一日　栄三郎誌

此度長州百姓騒動一件こ付同領浦島へ罷越し相鎮り儀哉否并船こゐ江戸表他領等へ罷越し候哉否見聞仕罷帰候様被為仰談去ル六日本川出帆仕七日朝大竹村御普請所小屋へ着仕兼ゐ被為仰談候御道具同所こ相詰候御代官手附へ申談仕尚其段湊喜兵衛殿出先駈合仕候同所より小方船を借り切八日朝出帆九日朝八代島へ着仕先達ゐ騒動致し候同島之内ニカマ（三浦カ）村へ帰り候処不人気之風体無之農業もいたし候儀と相見既こ早稲等刈候跡有之尚家村へ罷越し騒動之鑑（ママ）觴を聞探り申候処産物相始り候ゟ追ミ金銀両替六ケ敷相成百目に付萩札百六拾目ならてハ引替無之米直段も八升五合位こゐ百姓共難渋こ落入り当六月頃より人気不穏候処先達ゐ同島荒神祭礼之節米弐升庄屋方へ買こ参り候処米無之由こゐ売不申然に処他所船へ米三俵売候を見付夫ゟ百姓共庄屋を毀候旨又同島之内小松カイサク（開作）ト申ス所へ参り此所は大家多く塩浜（矢田部）も数ミ有之候不人気之有無相尋候処先達ゐカイサクノヤタベト申ス大酒屋を毀還候処へ官場より代官出張有之願筋ハ聞届可遣候こ付相鎮り候得と被申一応鎮り候得共いまた村こ熟と居合こ至り不申由右代官同所被引取今以官場こ出張有之由尤此節は金銀両替百目こ付萩札百四拾弐匁位にて両替致し米直段も八升七合五勺こ相成候旨御国札通用之儀相尋候処匁札丁銭百弐三十文こ取扱致し候由こ御座候右願之趣相尋候処第一富相止金銀已前之通御引替被下庄屋役三年ツヽこ御仕替可被下旨且又江戸表其外他領等へ船こゐ出候儀は無之哉と相尋候処此儀ハ一円無之趣こ候夫ゟ上ノ関へ参候所室津と向合候ゐ双方共大船輻輳いたし繁花之趣こ

ゐ一円不人気之風体不相見夫ゟ室津へ着此地も居合宜相見自他廻船之津こ付下筋之様子承り候処此度下ノ関辺も騒立又冨田ゟ遠石クダマツ（下松）へ大勢出候ゐ磯部申ス（下脱カ）大家を打毀可申由之処徳山より役方出張有之多人数被召捕候こ付引取相鎮り候由右室積は代官示し筋宜こ付御褒美有之候由沙汰致し候同所に建札有之文言左之通こ御座候

此節ぬす人又ハ浪人体之悪ものとも入込いろ〳〵の事をいゝふらし人気を立候よし相聞候付村こにおゐて右体之悪もの惣して無宿無宗門のものハ見合にからめとり申出候ハゝ御褒美可被下候事

天気合不宜同所留船仕漸十一日朝出帆仕徳山へ着船聞合候処先達ゐヤシトカ（夜市）申ス処ゟ富田産物懸り之庄屋を打毀チ候に付其報こて当月朔日富田ゟヤシノ俵屋を毀チ銀百貫目程も紛失致し并原田屋と申家家財計り打めき申候由其外富田の皮田四十軒余やき打こいたし候由其趣意は山口之岩見屋某中ノ関龍ノ口ト申処へ漬候皮を世話致し候に付右之次第又ヤシノ俵屋ハ身代宜貞実成人物は人之能承知も致し居小百姓年貢不納之節ハ助情等致し候様成者こ候処畢竟悪党もの寄り集り百姓ともを進メ立騒き候趣こ御座候由扨又徳山御城下より家老年寄用人其外諸役人弓鉄炮を持セ出張之様子全く出陣之如く有之候由右騒立之ものゝ内四十人計被召捕入牢こ相成居候由其内六人広島之もの有之夫ゝ御駈合有之候ハゝ生所も相分り可申尤下地ゟ罷越鍛冶職之手間いたし居候ものも有之趣右牢屋近所の小店こゐ承り申候不人気にて他所へ出船等致し候ものハ無之旨に御座候同所に留船仕翌十二日出帆致しトイヤ口（問屋口）ト申ス所へ着岸仕宮市天満宮へ参詣之体こゐ陸へ帰り三田尻を罷通候処大キ成繁（ママ）船有之稲作豊作と相見専此節刈こなしいたし往来筋家ゝ売事等もいたし相替候時無之先頃不人気之様子相尋候処当時相鎮り候由候浜辺之関屋と申豪家有之先達ゐ打毀候処最早取繕ひ其外町内こて毀チ家数之修覆いたし居申候且又往来筋閉門之もの有之扉子に左之通書附張有之

三田尻村庄屋
槐屋九左衛門

閉戸

御聞込之趣有之如此申付者なり

宮内畔頭
藤右衛門

夫ゟ宮市へ入込候処天満宮脇にも建札有之室津に有之候と同文言こ御座候夫ゟ中ノ関へ着仕承候処当七月廿七日同所之岩見屋を初在方とも都合四拾軒程打毀八月三日鎮り其後相替儀無之其外軒を落し又は柱こ疵付候家数ゝ有之候処いまた修覆不致候此節御吟味有之よし小郡其外村ゝも此節居合候由申候右岩見屋如軒と申スものも有之候由此辺ゟも船こゐ出候もの無之由同夜新泊りと申ス所へ泊船仕翌十三日朝出帆下ノ関へ着岸仕候処同所は九州北海船路之喉こゐ大船小船数百艘附居申候不風俗こ依ゐ乗船等いたし候船不相見候陸へ帰り室津こ而承り候様子を有之候に付何角承合候処去月廿四五日頃萩領吉田ト申す処一揆起り并海辺船木と申ス所も起り人数追ゝ相加り凡十三万弐千百人相集り新地産物方懸り役人を打毀チ夫ゟ下ノ関へ押寄可申由こ付長府より彼方多勢出張有之一応相鎮り申候由然ル処同所御用達岸屋茂兵衛船中へ尋来り別紙持参見セ申候こ付委細之様子相尋候処書附之通長府より出張有之百姓とも押寄来候ハゝ頭分之ものへ鉄炮を放し夫を相図に前後ゟ取囲ミ近寄候者は切捨と申ス儀こ候処萩領吉田宰判代官林喜八郎ト申人出張こゐ此度長府へ押寄候時ハ其発頭を目当こ鉄炮打懸夫を相図こ双方前後ゟ責寄不残打取切捨こ可相成其上こゐ殿様ゟ御内取へ御断り之御挨拶可尽之其段ハ百姓共こおゐても残念こ可存斯相成候時は残り居候者共を重き御仕置に可被仰付願之趣は拙者其方共之頭取こ相成相調候様取計可遣こ付引取候様被申付候処一同心得仕引取相鎮り申候由此度諸国ゟ浪人相集り社頭にて太鼓を鼓き百姓共を呼集め相勢之人数を指揮仕候様子中ゝ常体之者の所佐こ無之旨既こ下ノ関浪人木村又五郎黒田官兵衛楠数衛と申ス者来り上より不審懸り追手出候処手に入不申九州へ趨り候由こ相聞申候此辺百姓共之願節相尋候処村ゝ凡同様之事こゐ富産物方ハ此節相止候金銀両替已前之通御引替之儀は三ケ年相待候様被申付又此願出候趣ハ大庄屋御止メ村ゝ庄屋一ケ年宛こ御仕替可被下候并先年四斗俵三ツ俵こ被仰付三

斗三升三合五勺之処壱升三合八勺ハ御免之定にて三ケ年は其通之所九ケ年庄屋手元へ押取候に付当年之御年貢ハ右押取こ米へ利足を付候ゐ庄屋ゟ相納候様歎出候処右林喜八郎被申候様ハ庄屋押取居候米は差出させ可申候得共庄屋を打毀候故利米ハ得差出申間敷こ付此儀ハ不相成と申被渡候処是迄百姓共未進いたし候節庄屋へ利米付取候こ付何分利米も差出させ被下候様押ゐ申出此段上におゐて判断六ケ敷様子こ噂仕候重役始此度出張之役方将束相尋申候処皮羽織塗笠と申候足軽等は其通こゐ可然候得共重役之方角不都合こ奉存船頭共同所問屋へ参候節相尋させ候処重役衆ハ全具足を持せ出張被申候由扨又諸国ゟ萩へ使者有無相尋候処肥前肥後小倉其外近国皆こ御使者参候由尾張紀州ゟも御使者有之ケ様噂御座候得共此儀は確と不仕由長府ゟ之御使者いまた不被罷帰由下ノ関へ押寄可申と沙汰仕候節同所より家財等豊前豊後へ送遣し置候処此節追追取寄せ候趣こ御座候豊前豊後にも海辺へ彼方出張有之尤平服之由申候石州境阿武郡ハいまた相鎮り不申由相聞申候右一使こ付江戸其外御他領へも出候ものも有之候様風聞仕候得共此儀は一円無之事こ御座候申誠こ大坂陣已来之騒動と右茂兵衛申候此後相替儀有之候ハヽ早速書状ヲ以申越し候様申聞置候天気合不宜留船仕漸こ十五日朝同所出船仕只今罷帰り申候

右茂兵衛差出候別紙両通并此度罷越し候海上之略図仕奉入御披見候此段申上候已上

（天保二年）卯九月十七日

(7) 防長両国百姓騒乱大意画図

（表題傍註）「天保二年卯七月中旬ヨリ九月上旬こ至」

（原本は絵図であるが、こゝでは一揆状況についての記入部分を抜粋した。）

小瀬川

高き家にあかりて見れは
けむりたつ
民のかまとハ
にぎわいにけり

御庄川

東川

高森駅

今市

今市辺三ツ尾領主宍戸六十日計之病気こゐ死去此辺至ゐ静か也

呼坂

花岡

富田川崎

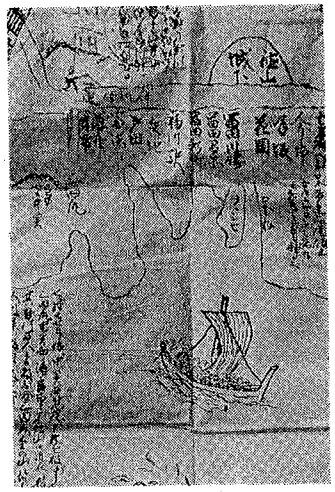
富田間所

富田新町

福川駅

矢地

九月二日ゟ始り徳山領福川富田戸田富海等近在村こ充満して不残破る其数不分川崎之穢多五十軒やき打



防長両国百姓騒乱大意画図（部分）

戸田

富海

浮野

宮市

三田尻

くわのや

ま中ノ関

西ノ浦

七月廿七日ゟ始り中ノ関石見屋と申家を破りすへて防府内三田尻中ノ関西ノ浦宮市不残山口近在村こ一統こ催其勢何万人と云数不分三田尻くわの山こ陣を取り追こ人数集り防府之内二百軒余も破也浮野峠より佐野峠迄防府之内也

鯖川

佐野

大道

岩淵

すへ村

佐野川小郡川迄内小郡才判こしてなた嶋村之内米屋清兵衛と云者を破り其外二十軒余も破よし防府勢之内なり

鯖峠

峠先仮番所より中ノ関石見屋ヲ□（判読不能）事始り夫こ追こ騒乱す

鯖川向穢太村五六十軒破る

徳地　此辺本手領徳山領入まじり徳地騒乱之時徳山領之内より少し破よし

山口　八月廿九日頃防府勢山口市其外百軒余破るなり

小郡川　八月十八日頃ゟ始り吉田船木麻賀川其外山の手沖浦之者充満して近在村ゝ不残破るなり

小郡駅　三軒其外此辺破る

賀川村

山中駅

二俣川

両川　二軒破

下能　三軒破

薬師堂村　三軒

吉井　壱軒

船木駅　数不分

麻市駅　一軒

麻川

伊佐村　十八軒

つぶた村　七軒

はふ浦　十七軒破る
うつい村松屋村之内庄屋町頭（畔カ）等九軒破也
其勢はふ浦へ越し沖浦へ越し沖浦破り賀川ゟ出此所こゝ萩士林喜八郎治と云也

吉田川

岡た　三軒破

小月

先大津　三軒
千崎近在村ゝ催し其勢充満して萩近辺北浦道其外不残破るよし

笹波
中道通村之庄屋其外産物方富方相場人等追ゝ破よし其数不分

明木　八月廿七日夜九軒破
川上勢近辺者なり

川上村　八月廿五日夜十軒余破る
川上勢なり

八月廿六日昼夜家数多破る
其勢わかれて近在村ゝ破る
廿六日夜廿七日昼所ゝ破り通り
笹波へ集る

挨の光景を生き生きと伝えているのが史料(8)（抄出）である。高橋は山口多賀神社の祠官。多賀社文庫。

(8) **天保二年雑記**（高橋有武日記）

一（八月）九日山口御茶屋こて例年八朔ノ御のし御名代当年百姓一騒動こ付八朔延引九月こ有之

一徳地二宮御祭礼延引祠官之内こ打コハシこ逢たる故之事歟

一廿日御目附衆三人出張（註）（御目附衆ハ花岡ゟ出張相成由）同晩山口下立小路泊り壱人ハ幕宿（註）（境屋也廿一日之朝聞右宿之内御使者も有之由左候へハ幕宿ハ御使者ナルベシ）

同日承り候へハ西方起りむねとうの酒家こわし申候一昨日之事と申候小郡才判北方之宮こ百姓中集り大綱を打申由

一廿日市中廻文相成候相場所御内用方産物方富太一被差留候四町ハ廻文にて脇町こハ四通授こ御座候下羽坂ノ者参り候て相応之恵ミ遣候様こと申候事

一廿一日之朝上宇野令御庄屋竹下喜右衛門役座之存内畔

Ⅳ　山口町での風聞記録――天保百姓一揆の実況

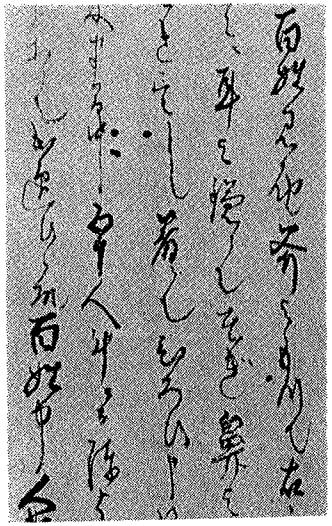
全藩的な百姓一揆に当面しての役所側のあわただしい動き、昂然たる農民勢の前にたじろぐ役人の姿など、一

頭証人百姓罷出御沙汰之趣被仰聞富太一産物方相場所被差留候段御授之御書渡被仰付候法泉寺村之儀ハ畔頭久左衛門証人百姓弥介小触金蔵罷出候事

一廿二日御代官天野忠兵衛方常栄寺へ参詣こ付廿二日之夕方こ山口出張之御目附井上六郎右衛門宿　豊後や九右衛門所　見廻被申候処御目附ハ馬之用意相成小郡ゟ出張之支度こ御座候処萩ゟ御目附出張相成候故山口之御目附ハ小郡へハ出張無之候殊之外大騒動こ御座候

一廿三日今暁萩ゟ御目附衆其外盗賊方出張山口へハ暁方こ高張桃灯こゐ出浮候て上立小路辺之者ハ朝戸明ケ之節故御事やらと驚入候御目附ハ早馬こて候下立小路井関屋喜右衛門所こて朝仕廻相成候至極隙入候五ツ半頃出張候て御目附ハ山口こ在番之御目附井上六郎右衛門と暫談合有之別ゐ隙入候急キ候節出張こ無之候身を囲ハれたる様こ見入られ候よし御目附之備ハ合羽籠傘持候て陣笠こて賀川之本間庄左衛門所を今廿三日之朝こわせ申由候賀川市今井屋と申問屋一番ここわせたる由こ候至ゐ手荒キ由こて山口下代国司直左衛門御作事方井関平八ハ才判境朝田村ゟ出張こて本間ハ三斗俵を三斗六升ツヽにして取立たる故其米を払出し可申哉左無之候ハヽこわせ可申と申こわせたるよし

一美祢郡も騒動仕候大田市日ノ熊其外綾木酒屋大躰こわし申候迫と申所こてこわせ候家ゟ抜身にて一人斬られ申候十文字原こて一人鉄炮こて討れ申候夫故百姓中集り敵キ討可仕哉と申美祢之勘場へ詰懸ケ候由候美祢郡之手役こハ豊田之西市へ出たるとも承候舟木才判と一手こ成りたる共申候毛（四本松アキノママ）家来何某壱人斬たると申両三人も斬たるとも申然共右之家来即座こ百姓見届斧



高橋有武日記（部分）
百姓を斬り殺した武士を百姓達が逆襲して惨殺。

をもつて右之肩より打落し追ヽこ耳を鎌こてそぎ鼻をそき手をきり後こハそき尽し箸こてひろひ申様こ仕候よし左候へハ右家来半間中五十人計こゐ陣支度こて抜身或ハ鎗長刀等こて出迎ひ候故百姓中人数を集め六七百人計も一手に懸り候へハ人数まけこゐ家来中散り〳〵こ逃ケたる由こ候吉田こハ三人連こうちたるとも申候区ヽ之評判こ候

一小郡こハ御代官渋谷源吾と申候今井屋と申問屋之後こ被居候を見付石打仕候嬢へ当り怪我と申候御代官こてハ無之下横目とも申候御目附こても寄せ付不申候割木たい束なと思ひ〳〵こ取懸ケ投ケ懸ケ候故中□（々カ）六ケ敷候盗賊方之手之者組之者両三人も怪我仕候由棒なとハ取上ケ候由（マトキ）なとも取揚ケたるとも申候

一舟木御代官（ママ）ハ田へ追込候由百姓中斬候様こうち候様こと差図相成たる故歟萩ゟ急こ被帰候様こと申参り早連帰萩後役御代官即時出勤之由こ候

一長崎御奉行下向こ付関札持之備へ百姓共より壱人被疵候由其跡を鐘太鼓こて五十人計百人計百五十人計も追ここ付ケ下候よし是ハ山中辺之事こ候小郡へハ御奉行通路人夫こ罷出候節こわせ申由候凡四五百人も人夫入候よし

一賀川之方こてハ御目附も追散し馬も捨候ゐ歩行こて逃ケられたるよし

一小郡之方ゟハ出浮不申候故鵜カ森こ控居候ゐ小郡之者へ申事有之候相談候間鵜カ森へ可参哉不参候へハこわせ申由申候と聞候此内以集りたるハ北方之宮と申際波月井関賀川辺之百姓こて候

一阿武郡も起り吉部之勘場をこわせたるよし廿三日四日頃こて徳佐へ出候よし

一大嶋郡起り小松之矢田部をこわせたるよし下松之磯部もこわせたるよしも評判仕候

一大津郡前先共こ起り瀬戸崎鯨問屋中十七八軒こわせたるよし三隅むねとう之酒屋をこわせ候よし八月十六日頃之事こゐ候いまた静り不申候よし

一舟木之山方帰萩之所江藤辺通路を留候役人こ付通せ候様こと申候へハ百姓中聞役人ならめげ〳〵と申追立候

ゆへ山口へ廻り一宿こて帰萩こて候事其後ハ中海道通路留り申候舟木吉田へ之通路山口通り出張こ御座候西方之人数ハ万人之余こて御国之御太事恐入たる事こ候

一廿五日之朝承ル小郡ゟ山口こ出張之御目附を呼こ参□（虫喰）百姓中申上ル儀有之候へ共御代官へハ不申候御目附ハ直こ申上ル由申こ付被参候様こと申候こ付即時出張御座候馬ハ平佐半助方之馬こて候事

一廿六日之朝五ツ時分小郡ゟ御目附井上六郎右衛門山口へ被帰候小郡中領八幡宮へ近辺之百姓共集り盗賊方出張候へハ竹槍こて追散シ候よし御目附ハハ委細こ可申上と申こ付出張相成候ハヽ何角望事余分申上候趣三斗俵之俵代壱升ツヽ之分四合八勺被立下候上ゟハ壱升ツヽ之由こて是も壱升ツヽ被立下候ゟ初たる年ゟ壱升ツヽ之割こゞ立戻シ之事と申候

一小郡ゟ下ミ之人数こハ怪我人有之故右之御裁許付候迄ハ引取不申と申由こて舟木御代官香川久右衛門と申ハ弐人手討こ仕候由

一朝田村仁保津辺起り騒動仕候故役人衆出張相成候事是ハ纔之人数故歟納り申候

一小郡之秋本（ママ）　と申庄屋仕候用心仕候ゟ荷物ハ山口矢原ノ吉田（富カ）藤兵衛所家元こ付荷を預ケ候処追ミ聞付候ゟこぶりこ参候段申候由

一廿五日之夜中明木之市其外滝口と申庄やこぶり申候四五軒之事こ候滝口ハ蔵ハやふりたる由候佐ミ並へ可参と申候へ共萩ゟ之出張数多故佐ミ並ハいまた無事こ候人数ハ追ミ引取たるとも申河上之勢と一所こ成たるとも聞へ候明木こて六七百人横瀬辺之者こ候由萩ゟ明木迄役人衆方出張こ通路通六ケ敷相成候毛　内匠殿大屋之酒屋迄出張町奉行ハ橋之脇斉藤迄出張こて内匠殿備先乗り有之陣笠こゟ有之由同勢百人余こ候

一廿七日篠目之方起り候阿武郡之人と一所こ成候後騒動こ付検使山崎庄蔵御作事方井関平八御紀方安田四郎兵衛山方瀬川与兵衛出張之由候御目附井上六郎左衛門も出張候事

一廿七日夕方ゟ篠目村ハ出張相成候処岩川迄出張候へハ先刻こ篠目村を五軒こぶり八町越仕首きれ地蔵へ通り佐ミ並へ出浮十壱軒或ハ十四軒こぶり申候廿八日朝七ツ時分迄ここぶり済申候山口御代官天野忠兵衛を初め宮野口へ出張こゟ徳万之隣り之寺へ寄酒なと出候所へ御目附通り懸ケ大公事被申たる由候事佐ミ並之酒屋ハ御役人方之宿こ付こぶり不申候大下モこ畔頭壱人こぶり申候初め出懸ケこハ御役人之出宿こ付こぶり不申候之所廿八日之朝引取時分こ右之畔頭おハし（こカ）申候御目附衆へ願筋之事申上ル以上十七ケ条と承小郡ゟ御目附へ申上候儀十七ケ条明木こて申上たるも十七ケ条と承候

一萩浜崎騒動仕由風聞御座候浜崎こゟ第一番こ古キ米屋山本屋万吉と申をこふり申候由風聞有之いまたとも申候廿人計浜崎より御蔵元へ御願こ出候由就夫御役人方往吉社へ出張相成暁方こ及候夜明ケ之よし申候

一川上ゟ出候ゟ斉藤をこぶり申由こ申候福井ゟハ小林両家をこぶり申候様之工面仕由こ噂有之候

一須佐こハこし落合候所破り候ゟ海へ引倒シたるとも申候

一此度騒動こ付張本人御鑽談等又ハ壱両人（後欠）

一（九月朔日）同夜中市中こゟ六人閉戸仕候是ハ米之ゟめ買なと仕候様之者こ有之金古曾町ノ安左衛門　是ハ上立小路松村藤右衛門養子ノ親　川向ノ水津幸二郎米や町大和や茂兵衛道場門前こハ若林

一同夜中宮野おこり申候龍王へも集り申候庄屋代り隙取申こゟと歟承ル

一山口御代官天野忠兵衛方下代国司直左衛門御用有之帰萩候様こ申来候付二日八ツ時分国司直左衛門帰萩之由御代官後役熊毛御代官赤川九郎左衛門下代役之後役近藤七右衛門也下代役ハ九月朔日被仰渡候

一朔日之夜宮野中百姓龍王こてかゝりを立候ゟ集り申談事仕候勘場へハ大評判こ聞へ御目附之外御代官下代役等三宮迄出浮候所格別之事こハ無之候庄屋之交代御沙汰無之様と申何角と願筋之申談と聞候事

一平野村中騒立候宮にて綱を打申候庄屋役をこぶり申由こ候存立こ聞候是も折相たるこ可有之候

一三日中尾村中騒立申候こ付ゟ勘場ゟ筆者役安田四郎兵衛大庄屋徳万伊助小都合野村吉右衛門其外出勤こ候

一御目附井上六郎右衛門今日帰萩之由来ル十三日頃こゝ
又〻山口へ出張之由こ候
一三日左之通御沙汰有之
　此内諸所百姓共騒立候趣こ付ゐ種〻風説雑語等を以
　諸人を迷ゝし自然と人気之障りと相成候様取成候者
　有之候右躰之者を見当り聞付次第急度可被及御沙汰
　候事
一同断こ付諸所ゟ諸役人出張被仰付候往来之節於途中
　見物いたし立留り候者も有之様相聞候都ゐ多人数一
　所こ相集候儀ゝ御法度こ候処甚以不心得之事こ候向
　後右躰之儀無之様此段下人〻〻迄手堅可申聞候事
　右之通組支配中ゟも可被相触候事
　　卯八月
一都濃郡富田辺起りたる様之風聞有之三日之夜山口こ聞
　候矢地より起り福川へ行追〻登り申候由矢地七八軒福
　川富田同政所川崎迄こぶり申候
一矢地福川富田辺騒動之事ゝ九月朔日と歟承ル徳山より
　役人出張有之候由岩国領ゝ玖珂駅迄岩国之役人出張こ
　候
一大嶋郡小松之内椋野と申所こ庄屋壱軒こぶり候由こ風
　説有之矢田部をこわしたると申ゝ噂計と聞へ候
一舟木之御代官香川（四日）（ママ）　御算用方其外美祢之郡境へ出
　張候ゐ此方之受場之才判へゝ入不得申達ゐ押付入込候
　へゝ斬捨候段申方こて候へゝ入込こ付覚悟仕候様こて
　申候ゐ御代官御算用方手子等こて三四人斬たる由こ候
　右こ付一応ゝ引取候へ共又〻騒キ立候ゐ勘場へ罷出候
　ゐ御代官へ逢申候度と申候へ共とふも成不申候故夜之
　間こ萩へ被帰候事と承ル
一鹿野山代辺騒動と噂有之御目附衆萩ゟ出張候下横目と
　（五日）
　鰐石之半左衛門世悴罷出候事
一熊毛郡も起りゝ不仕哉如何哉と気を付こ被参候事
一山口市中年寄惣寄り相有之候騒動貫キ之申談候事
一吉屋ノ家中矢田（八日）（ママ）　と申ゝ親類ゟ始抹頂居仕候是ゝ
　去月朔日山口騒動之節吉蔵檜ノ木峠こて子供なと集め
　候ゐかね太鼓こて騒きたる御咎こ御座候
一此内油せう油之類直下ケ仕候油壱升こ付銀弐□（十日）（虫喰）（和市）わし廿
　文せうゆ同断白米八合壱勺売こ御座候七日ヨリ下り申
　候萩ゝ油壱升こ付壱匁下ケこ仕候様こと御沙汰相成候
　由山口こて打わたわし十八匁こゐ候酒ゝ酒屋中こ無之
　大市大野や忠兵衛所計こ此節酒売申候
一十日当才判上宇野令御庄屋竹下喜右衛門存内之畔頭証
　人百姓十人頭等いつれも御代官所へ被召出被仰聞御座
　候御読知も御座候糸米村畔頭長七証人三五郎白石村畔
　頭太郎左衛門証人孫介法泉寺村畔頭久左衛門証人弥介
　天花村畔頭畑村畔頭ゝ畑ノ藤二郎兼帯畑村証人（ママ）　天
　花証人吉左衛門と申御代官下代山方御相対こゐ御座候
　由
一辻〻ゟ小キ横板之札被差出候事文言写
　此節盗人又は浪人躰の悪もの在〻へ入込いろ〳〵の
　事をいひふらし人気をさだて候よし村〻こおゐて右
　躰の悪もの惣して無宿無宗門のものをは見相こから
　めとり申出へく候御ほうび可被下候事
一十二日山口町方御役所御算用師藤井清右衛門儀役筋被
　差替候是ゝ数年来之勤切も有之候へ共何分御目附方へ
　申込たる事故歟萩ゟ申来候趣こ御座候後役之儀ゝ松永
　新九郎養子喜三郎へ被仰付候大市安藤善左衛門儀魚セ
　リ場へ出勤之事被差留候世悴（ママ）　セリ場へ罷出候由
　こ候左候ゐ安藤事魚問屋の頭取と申儀被差留候問屋中
　こ不束之儀有之候ゝゝ売り子ゟ可申出候売子こ不束之
　儀有之候ゝゝ問屋ゟ可申出候と相物小路魚之棚こて町
　方本〆藤野市郎右衛門役付（ママ）　打廻り罷出申渡御座
　候よし
一岩国領こゐゝ萩札をゝ五六拾文位之通用こ御座候処此
　度御国中騒動こ付ゐゝ彼是差問たる事こ付岩国領こゝ
　萩札を正銀こ引替可被遣こ付大悦仕付出シ仕候処三拾
　目之所へ三百目之申出仕或ゝ五百目札持合せ候へゝ五
　〆目之付出し仕候様之儀有之候右ゝ付出こゝ高を太く
　仕出し置諸所こて心遣可仕候所一向こ手こ入不申事故
　不筈こ相成候故夫等之人数ゝ御付取り相成候由こ聞へ
　候
一網〻乗り物こ乗り三四人昨日か通路仕候花岡辺こて召
　捕萩ゟ検断頭其外取人参候ゐ連越候

一十八日矢原村御庄屋山田和吉事御役被差替候後役藤村助四郎へ被仰付候此内御代官村廻り之節百姓集り早鐘を突候由こて早ゝ被差替候由候事

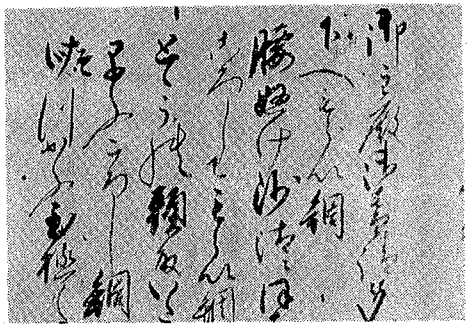
一追ゝ小郡其外こて悪賊惣被召捕候事萩へ出候事

一徳山領こゝ悪賊人追ゝ被召捕四拾人余尤穢多を別ゐ破却仕たる事故右被召捕候百姓をゝ穢多之手こ被成御渡候付ゐ穢多共打寄り手足之爪を抜キ或ゝ筋をきり又ゝ肩をうちなやし腰をうちなやし種ゝ様ゝこ手を尽し申候痛め申候由風聞有之富田古市之穢多を重ゝ破り申候よし徳山領こゝ河原者居往不仕故咎之者ゝ直こ穢多ゐ被成御渡候故此度百姓中以之外気毒かり申由こ御座候

一山代才判（十月十九日）こゝ家破却事ゝ無之候へ共常ゝ持方不宜又ゝ〆め買〆め売等仕者或ゝ庄屋役こゐも勤方不宜地下向不評判之者此度破却可仕と申評定こ拘りたる家をゝ御代官所聞込こゐ閉戸或ゝ村退所退等之咎メ申付有之候よし承ル作甲安芸事伊勢御祓配札こ罷出候ゆへ能く聞へ申候山代才判へ横目之内へ山口鰐石町在往ノ内田半左衛門世悴（ママ）事罷越候長ゝ逗留仕候山口へゝ便宜無之一向音左右も不聞候右村退所退こ被仰付候者ゝ甚以難渋之事之由こ聞へ候

V　萩城下の投書と落書——藩政批判と世相風刺

全藩的な百姓一揆に見舞われての、領主側の衝撃は、「洞春公（毛利元就）以来之国地を、百姓共踏荒し」「芸来三百年之御家と御国を百姓蹴立候口惜さ」という、例の天保改革の担当者村田清風の言に代表されるが、目安箱の投書もまた、一揆以来の情勢を「下こ権を取」る事態だと見、「上ゐ権を取かへ候事当時第一之急務」だと叫ぶ。史料



密局日乗（部分）　天保二年十月の落書の文句。

(9)は、毛利家編纂所で「近代物」史料として別置されてきた史料群のなかのもの。史料(D)は、同似のものが、「周長乱実記」第四之巻（『防府史料』第五輯所収）、それに福原家文書（『宇部市史』資料篇所収）に見える。

(9)　**目安箱投書**

(A)　（表紙）「上」

（裏紙貼紙）「目安箱こ入有之由こゐ未ノ二月廿七日福原三郎左衛門ゟ受取之」

今般木原源右衛門江戸被差登候御用ゝ検地石盛之儀とも御国産御取立とも風聞仕候弥右両条之筋こ無相違候得バ甚以不可然其訳ゝ卯之秋ゟゝ今以人気不穏下こ権を取毎ゝ諸在結党激訴ケ間敷儀有之候得共諸向先年之大変こ懲り大概之筋ゝ下申出通こ仕候故愚民之習益ゝ付上り我儘理不尽申募候由其中ゐ右様之御沙汰有之人気騒立又御手戻之儀有之ゐゝ猶ゝ御威令之挫故能ゝ御詮議有之度夫よりゝ都合人気静り候事こ付漸ゝ上ゐ権を取換少も非法苛政之沙汰なく諸事廉直仁愛を専とし夫こゐも非義法外を企纔も結党激訴ケ間敷事有之時ゝ厳刑を以後来を威し一村二村騒立候共速こ多人数被差出武威烈火の如き時ゝ奸民も被奪心魂人集仕候儀不相成先年も山口こゐ烈敷不作有之時ゝ諸方蜂起ゝ不仕処かへす〳〵も残念之至こ奉存候夫已来上を侮り居候事故先新法事ゝ差止諸方ゐ其沙汰相成上ゐ権を取かへ候事当時第一之急務と奉存候事

一検地之趣意ゝ厚薄抨変こ限候延地を石盛を為し所務召上りも無理とゝ難申候得共夫ゝ御馳走石等も無之時之事当時之如く七ツ近く出し此ゝ畠堀延地も無之ゐゝ下難続不遠卯之秋之通大変こ立行候事故執之道被差留度全躰御所帯方等ゝ無遠識上こ有ゐも下こ有ゐも宜事と上こ括り候由正金銀こても米こゐも下之迷惑こ相成候百姓足バ君誰と共こと足ざらむと論語こも有之候得共動バ下を損し上へ増候政事故不残手戻りこ相成御家来中御恵百姓ゐも御貸米御救米之類不絶有之無益之事多く相見へ候腹心之病を手足ゐ当分移候ゐも終こ腹心之病こ立戻り候事故此処能ゝ御詮議有之候事

一国産御取立之儀ゝ無之ゐ不相成物こ候得共先年之御内

用こゐ人気を損候事故是又急速こ難被行殊更株座抔と申候て諸民之利を壱人こゐ括り候様成筋別ゐ人気こ支り申候先年御内用之趣意も悪敷事ハ無之下之便利こ可相成筈之処出張之役人大躰其箸こ不中其上水こハ水之垢溜り候故争利之事を役所悩候てハ必定其害発候こ付何事も下任せ人気こ飽せ候様成事こ候ハヾ兎も角もいが程初ハ妙論有之ゐも又旧弊起候上何分国法も恐刑を憚候様こ不相成ゐハ実こ難被行奉存候事

一御国産之内松本深川等之焼物紙之類ハ諸国ゟ響候品故追ゝ被入御手度近頃小畑之焼物も北国其外迄積帰候様子絵盃共ハ諸方懇望仕第一茶わん類大躰御国仕入こゐ相済正金銀余分之強ミこ相成候処是迄余分之仕入銀出候分追ゝ納入無之ゐハ当分之仕入銀御所帯方ゟ不差出諸問屋之仕切も日を縮厳重こ相成候故茶わん屋中申談小畑之分ハ近頃買入不申由夫故能キ細工人等も離散仕候由扨ゝ残念之事譬万貫目先年之御損有之候迚も当事御国益之儀可差止筋無之差止候時ハ弥今迄之御損銀可取返目途無之儀をいか様之見付哉難相分候御両国中ハ上こ有ゐも下こ有ゐも同様と申儀と不存纔之帳面こ計目を付候故国家之大計所詮間違申候絹機共も最初ハ莫太之御公損之由然共当時ハ余分之御国益こ相成旦難渋之諸士中内職こゐ取続も相成様子両条共こ此余弐拾〆目三拾貫目御仕入損有之迚も夫ハ札銀こゐ相済正金銀三百四百之競こハ相成事故弐十石か三十石か已ミが所帯こくらべ候小量を差止候様こ被仰付度候事

一諸色高直上下之難渋も札歩之下落故之御座候ゐ追ゝ御詮議被仰付先頃ハ百弐拾目余も仕候金子年内こハ八拾弐三匁こ相成諸物直引被仰付御国中ゟ御触出しも相成一統難有奉存追ゝ昔之通こ可相成と悦居候処肝要仕入之時節こ至百目を越候へども少ミハ売金有之風聞ゐ已こて格別被仰付方無之ハ扨ゝいかが敷事御末家領等ゟ聞へ候ゐも気毒之儀こ付何卒旧冬之沙汰水之底迄行詰候様こ有之度全躰ハ卯之年ゟ御用所こハ専人気を恐一昨夏か米高直之時も頻ゐ売米等之肝を煮候を御所帯方不快こゐ米銀之手ハ役座之預入ざる世話と申様こ引受御用所こハ御政事こ携候事ハ此事之司り故夫こ拘候儀ハ米銀迚も差引仕候と申力味出来至ゐ中不宜御用所之向ハ御所帯方こ支御所帯ゟ申出候事ハ御用所こ難候様こ相成候由町家中買御用聞共ハ御所帯方ゟ親敷出入仕手子中共内論同前故其頃も御売米出候と噂有之ゐも町之者預メ伺聞米ハ少も無之御囲戻こ相成候筈又ハ五百石と申ゐも実ハ弐百石出候抔と申詢候事ハ世上存之事追ゝ退役仕候者も有之候得共今以其意味有之旧冬ゟも専不快と相聞正金売下被仰付候ても元来御貯ハ無之御用所之手式こ米銀之手相成物こてハ無之抔と御所帯方辺ゝ噂有之由速ミ相場人共承伝立伝又ミ米銀共こ高価こ立帰り候も一和不仕故之儀と奉存候夫こ付種ミ雑説申触候得共双方共こ強気こ頼れ候と申儀もうり付候抔と申事も不残中買共之得手ミミこゐ申事こゐ必定嘘と被存候一旦ハ御用所之勢こゐ押付候ゐも御所帯之方米銀之事こハ下こ位候故彼方之あぶて言を聞候てハ金等も百目を越候迄こ引上候実ハ双方闇之礫こゐ慥こ目当ハ無之探所作と相見候御用処ハ去秋ゟ之新手御所帯方ハ皆ミ久敷所勤故金和市下り仕方有之候得ハ今迄ハ無之一昨年行候得共偏こ見詰ハ無之御用所こ悩候を幸こ遠方ゟ悪口計申候ゐ何之益こも不相立候間何卒睦敷申合札歩立戻り手断有之度左無之ゐハ諸物即時倍価こ相成申候先毎日三貫目宛こゐも於新蔵引変之道明候ハヾ諸方ゟ第一こひゞき可申と奉存候事

一職役手元も此内ゟ引籠御断申出候風聞実事共こ候ハヾ手強御叱有之度ケ様之御時節一旦大任を受ながら我儘之儀図書知行こゐハ素難之取続越後も才器有之上御所帯方両人遠近方大坂迄相勤地方こゐハ可並者無之候得共気質烈敷故手元こハいかゞ之評も有之候得共ケ様之御地合諸向を押敷者こゐ無之ゐハ不相調故之儀こゐ可有之御尤之御事と心有者ハ執も申候処又ミ退役被仰付候ゐハ其詮無之事故繁沢ゟも借銀成と被仰付手元も我儘不申気品も静候様こ被仰付度肝要之役所時ミ交代有之候ゐハ人気危踏弥御役ゟ身を入候者無之御時節之立戻候期無之と被相考候十人が九人過失有之候得共凡愚之者ハ目こ不立才有者程疵も太く見へ候得共ケ様之地合こハ無疵こゐも痴鈍之者ハ御役こ不相立故人才御用

第一ニ奉存候枢要之御役毎ニ代り候てハ呉ニも不御為御直目付福原平川抔も隠居申出候由ニ候得共何卒被差止度老練ニゐる地合を存候輩引候ゐハ諸事不相捌様ニ奉存候事

一近頃当役之面ニ頻ニ地下手子等之類強御代官中甚込り候由家老取次毎ニ罷越自身ニ申候仁も有之由大臣之身と〆匹夫之吹挙ハ不似合之事且其類ニゐる出候者ハ地下ニゐる貪り不申ゐハ取次等ハも賄賂莫太之由瑣細之事之様ニ候得共縮所地下之害ニ相成候事故与屹御叱り有之度右之綱手有之者ハ現在過失有之ゐも御代官不知顔ニゐる不差置ゐハ身之不為ニ相成候由以之外之風俗歎ケ敷事ニ奉存候事

一宮市聖廟之塔富之運上ニゐる御寄附相成懸候所先年愁訴之ケ条ニゐる被差止置候処頻ゐ山師之輩相願宮市中之関ニゐる興行相成候風聞塔之功徳ハ不存候得共不正之金銀を以無用巨木を費候儀神慮ニ可叶とも不被考第一他国人通路之場処富之運上ニゐる御寄附事相成候風評有之候ゐハ国体ニもいかゞ敷逆ニ取て順ニ守ハ一時之権宜故仰願ハ宝塔ハ差止社内数軒米蔵を建神供米と号し追ニ右御運上ニゐる米穀籾之類を貯諸方之寄附をも相集候ハゞ塔成就之銀高ニゐる余分之貯蓄可相成其上ニゐる飢民ニ恵窮家ニ貸新古入換等迄之法建被仰付候時ハ治乱之重宝御国之宝庫賢君之御仕置と地他感激之上仁恵万世ニ残り神慮ニも可被叶御事と乍恐奉存候元来富之儀ハ可然儀ニゐるハ無御座候得共三ケ之津ハ不及申九州其外数多有之事流行ニおくれ候ゐハ御国財他国ハ持行候事故一両所位ハ可然歟尤防府ハ先年初発騒立候所人心いかゞ可有之哉室積下之関も先年為有之処之上端ニゐる他国ゟも可来故興行被仰付度幾応も無益之塔ニ許多之材用を費より籾倉御取建被成候時ハ国家を利し飢窮を賑し仁君之英断万世不朽と奉存候事

一非常之御倹約ニ付御膳具御不自由有之候由ニゐる御台所御内用と歎申儀初り御配膳役其外懸り有之御城内其外諸ニ之畠御用地ニ相成其運上銀御膳供之御足しニ相成由於三田尻一昨年ゟ問屋口ハ魚問や新ニ被差免候も御奥御用と申事尤其節地下尋御代官所ハ被仰付候所下ハ尋候ゐハ不折相ニ無相違迚地下尋も不仕由故少しニゐる事有之時ハ魚問屋をこわし可申と薄ニ申合も仕候由前断畠其外種ニ之儀も可初歎と市中区ニ之風聞いか程御倹約迚も御口腹之御不自由ニ迄立行別之御作略有之ハ前代未聞他国人等之承候処至ゐ歎ケ敷由申候勿論上之被知召候事ニてハ無之色ニ侯諛ニゐる聚斂之儀御勧申上夫ニ付追ニハ小民之迷惑出来近来之人気ニゐるハ又人集仕候様ニ相成候時御奥御内用と申儀出来長州ニ一揆起候様ニ取沙汰有之ゐハ外実不相済物ハ其漸ニ発候故段付象牙之はしを作りて賢臣国之乱るゝを知る和漢古今被知召候通ニ御座候御両国中ハ不残御所有別ニ新法之御内用ニハ不及都合五貫目歎拾貫目か御徳を損候事何ニも換がたく御膳具御不足ハ江戸方ニゐる不相調ハ地方ハ成とも可被仰付夫程迄之御時節ニ六千石之御雇江戸方ニも六百石勘渡ニゐる御雇石之者にも今迄無之ゐ相済候役人迄有之其外寺社奉行等も両人ながら御足石其以下余分之御足し石御仕成被仰付候分年ニニ相増御時節柄不相応之事上ニ計御難儀被遊候ハ扨ニ御迷惑之御事と専風評仕候勤懸り之者ハ無致方勤切之面ニハ御足石も無之ゐハ小身者励も無之候得共不連続之事多候ゐハ人気不調してハ風俗之改候期無之故能ニ御仕方等之御吟味有之度御目代其外在役之者之前ニゐるハ憚り候へども打寄ニ候ゐハ様ニ之評論仕候故其内ニゐる事実ニ当候様成儀を相集此一巻を入尊覧候肝要耳目官之耳ハハ風説入がたく偶入候事ハ奸曲之者暗ニ讒言仕儀多く無実ニ陥候者多候間御取検至ゐ大事ニ奉存候事

一御家頼従来之難渋大身程不相捌由寄組之内ニハ其日も難相立者多由然処御所帯方辺之噂を承候得は上之御所帯さへ不相調下之事ハ不能論との事大ニ見識違上も下も同一躰御所帯御難渋之時ハ半知も被召上候又下困窮之者ハ御救も被仰付在役之面ニニハ引米減少石之仕組も被仰付所詮御手離不相成事御所帯計可引直所存ニゐるハ人気も悪敷費も出来却ゐ不相調ニ付一応諸借皆済被仰付其後ハ知行ハ携候内借被差止度稀ニハ人不知飢餓之者も有之由第一風俗之乱汚言語同断他処へ不達行計内ニニゐるハ子をうり妻をひさぎ渡世之助としばくちハ

素より人之物位押取候事ハ何とも不思被取候人もさ迄心こ不懸様こ成行候ハ能こ廉恥を失候御時節片時難差置御事と奉存候事

一先達ゐ岩国出萩之節今迄無之御熟和之御様子偏こ御徳化之所致と有心輩ハ折寄ここ悦合申候是迄之通双方意味合強表こ社不相立候得共先ハ御不和之様子故一大敵を御国内こ置候様成物故万一之時至ゐ不安心之処昔年之通こ相成候時ハ御家長久御両国ハ盤石之如こ候仰願ハ御連枝之内御見付被仰付候ハヾ弥於彼方も感腹可仕何時も御入用又ハ其御方様不応御意時ハ何時御取返し相成儀於彼方も其願有之候得共当役中私之持方こ泥不折合と風聞仕候実事こ候得ゞ不忠之儀兼ゐ彼家ハ大小名と取遣りをも仕候由故若御老中共ゟ取組仕候ゐハ其時節こここゐ御悩難相成事共出来候ゐハ不相済儀此期を抜さず倍こ親附仕候様こ被仰付度若御子様不被遣候ハヾ一門衆之二三男御養こノ被遣候様こ被仰付度然時ハ弥御徳義こ感腹仕誠こ千里之長城と奉存候事

一於下ハ専不遠御隠居之思召有之様申候こ実事こ候得ゞ以之外儀当将軍こも御七拾余之由筑前侯共ハ御眼病故頻りこ其思召立有之候得共御国費を恐御家中ゟも相願勧ゐ御参勤被成候由乍恐御壮年之上御気体御快然之儀こ御座候得ゞ国家之御為今替被遊御苦労度葛飾御殿之上又防府ゟも御隠居処被相建候ゐハ御国費莫太之儀姫君様方御入輿も差向居候由其上こ右御大礼一件之御物入嵩候ゐハ実こ御操出しも出来申間敷御家頼中も半知地下ゟも余分之御馳走掛り居候事故此余之出目ハ有之間敷大坂も近頃難渋之御談も有之候風聞何分御政事被遊御励人材被召出四五年之内こハ御仕組も可形付故其上こゐ御賢慮之儘こ被仰付度ケ様之儀ハ無官無職之者可申上筋無之御家老之任こ候得共壱人も国家之大計を論じ簡程之御諫申上候者無之様子故下之評論一家中こ代り申上候尚又葛飾御殿防府ゟ引候評有之即刻金も米も余分下ケ上下雀踊仕候所実ハ御国住居こ不相成と申時ゟ即時米金元へ帰り倍こ札歩下落兎角怨民多甚不御為事こ付何卒御勧被遊様ハ有之間敷哉其上先達ゐ強盗数人白刃を振り御酒宴最中ゟ踊り入余分之財宝取帰候と専風聞仕候虚実気毒不過之天こ口なし人を以言よしなれゞ偽ならゞ已後ここ御用心有之度実こ後之海手ゟ海賊来間敷とも難被申毎こ津浪之変も有之由彼是以御安心不相成事御国住居こ相成候時ハ実事正金銀之強よりハ人気之競不大形忽札歩も可立戻こ付程克御諷諫被遊候ハ御国之為御家之為大殿様御為こもよろしく旁以御孝道と奉存候事

此外申上度趣も有之候得共長篇こ相成事故追こ世上之風説承次第可申上候事

福原三郎左衛門殿

平川端殿　御披露

(B)

（表紙）「ふ」

十冊之内」

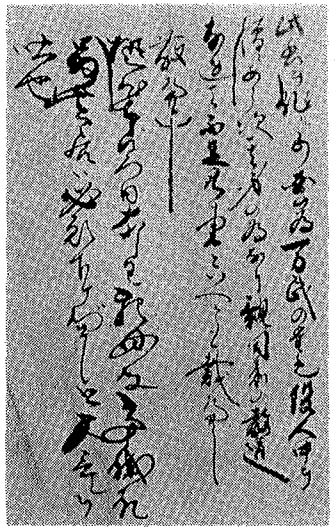
（表紙貼紙）「午十一月廿八日平川端ゟ受取之福原三郎衛門屋敷内こ投書有之候由」

今度下ノ関より富頼として御所帯方へ莫太之金子ヲ以取入役人中尤なりと是ヲ取次且山口屋三右衛門室積綿小御撫育方へ金銀ヲ遣り宮市の富ヲ取建芝居等茂始る由言語同断之曲事也古昔ゟ両国に富芝居是なくとも相済其時節は繁栄の地也右亭之悪事始し以来両国の難渋困窮ハ能人之知る所なりたま〳〵時節柄少しハ能なりあんどの思ヲなし替れば又こ哉富ヲ始メ傾国の元ヲ引出すハ役人之強欲心より発る所なり下之関富頼尤ならハ宮市も又上之関も中之関も尤筋是あるへし皆夫こ尤□（ヲカ）つけ差免し金銀ヲ取込工こ也不儀こして富カツ貴は人の憎む所浮へる雲のことし秘スル事役人ハ知るましと心得ても天知る地知る我身知るの理り山口屋三右衛門之曰福原三左衛門役中なら我レ富の頭取たらん事心の儘なり富弐ケ所の頭取と知るべしと大言ヲ吐キ金子ヲ遣し事迄其家来是ヲ知りて他ケ（c）（繩屋七郎左衛門曰なしわ頼母どの当職故芝居頼下べしと言）言こ及て萩一統こ知らぬ者なし悪事千里の道理何金曰萩中へ三合の米ヲ喰すとの大言ン大玉が壱升の米こ下落致たきと言しハ執か善なる歟天こ口なし人ヲ以謂しむることなり凡両国の非儀ヲ糺し死罪流罪数この科をわかつ役人として不儀こ組するハ則逆臣と謂つべし富壱ケ所始る

（c）（撫育役人飯田ヲ始メ）

ならハ徳山長府清末夫ミ真似ヲして忽両国数ケ所の富場所と也国の不為ニ成事ハ鏡ニかけて見るが如し其所ミへ悪盗入込人気ヲ迷ハし以前の如く騒動起すならハ数万人（c〔万民〕）の苦しミハいくばくぞや況や再度の乱ならハ大公儀の咎強く国家の大事となるべし左有時は今度冨取次の役人切腹か家断絶流罪か等は眼前なり近きは徳山の名古屋玉の井が格に至らん実ニ能き手本なり其時ニ及悔共甲斐あるへし遠きおもんはかりなき時は近き愁あり士の道は忠孝仁儀を専一とし国ヲ納るのたからなり傾国の為に録ヲたまわるへきや少シの利欲に迷イ其身の破滅を招き親子兄弟を路頭に立る所ニ気つかざるは愚の甚しきなり悪謀を工ミ繁栄を好とも豈天道快よからんや君に誠忠下万民の憐愍の辛労ならは他より進物の金銀を請ルとも苦しからす其送り物は讒（纏）にても花咲実なり福徳は富なるへし此理を弁へ国政を乱す事なかれ併二季に芝居ハあるも可也丸持の金銀極小人の手に廻り合城下も陽気となりぬべし是等の事は論するニ足らす故ニ前後能ミかへり見て富ヲ取次べからず返心すべし此理を用ず時は役人中金銀受納したる強慾心勿表方となるべし石をいだき淵このぞミ薄氷ヲ踏に果る事なし□て人の目さしニ合せ上一統悪言に及所之役人中徳山の名古屋玉の井か格ヲ望へからす事也我レ此書ヲ作ルも国の為万民のため役人中ヲ憎ニあらず其身の為なり親同前の教道あれは不足凡書といへとも載へし敬へし

（追筆）「樋屋七郎左衛門曰なしわ頼母殿当職故冨芝居ハ必願下ケべしと大言しヲ吐也」（c〔追筆なし〕）



福原三郎衛門屋敷内投書（末尾）

(C)（表紙）「ご　十冊之内」

（表紙貼紙）「午十一月廿八日飯田源八郎屋敷内投書有之由こゐ同人ゟ差出之」

（本文は、ほゞ史料(9)―(B)と同文であるので、(B)と異なる主要の部分だけを、(B)に傍注（c〔〕）の形でつけ加えた。）

(10)　**密局日乗**

(A)（裏書き）

（天保二年）十月五日

一此節落書数多有之

(B)（裏書き）

（月日不詳）

赤川ももふ夕貌（顔）としほむころ
　さかりの花を終り有けん
盛なを日の出といふはことわりよ
　よのな長者も末は内藤
三隅から山田こゐすむ田舎もの
　セけん知らすの御内用とハ
札銀をなんといつしか不通用
安藤のならぬ内輪金持
田の中の毛上も見すに相場する
　国民人のあぶ取かな
伊藤ない口ニてよろ〳〵くを付る
　我身の難をこたへつらんか
山下かそこつから出す不当りを
　酒きけんては人は通さぬ
小田原のういろふ売ゟまた悪ひ
　したまて一身しての役から
吟味顔高ふもいわぬものこしを（此所不分）
　聞たがるもの村田
かくしをく正金銀を出すものか
　いらぬ札銀てゝのはたらき
あまてらす神の御末の国□様（主カ）
　国万民を祈り給ふは
筑前は目医師所と聞およふ
　才智なければやぶ医師同前
何事も内通し人とおもひしか

しやか月洗ふあく水なかし
蔵主と書とも内はおふくろ
底やふれても分前かなし
立ぬやう栗の伊賀をは用心し
是はまつとひ身をかこふため
笹の丸原すし程の智恵を出し
むほんでなけりや今は当らぬ
さあせひとひろけて懸ルいかり役
時の関白これて年こふ
さいしよから出さぬ知恵こそ浦山し
奥のしれぬ先か楽しみ

(C)（天保二年）十月八日雨天

一此節落書左之通

御国中樽肴献上仕候目録之辻
かつし（蔓飾）か御隠居被成樽
殿様御国ゟもとし鯛
武道わすれなため樽役人引ケしてもらい鯛
御主殿御普請被成樽（費）ついへを下へもらい鯛

腰ぬけ沙汰こほこり樽百姓ころしてもらい鯛
（徒党）とゝうの頭取いたし樽召し人早ふころし鯛
（卒興）そつかふ至極てころし樽代官（未熟）ほめ詰てもらい鯛
願ひゝないかとおしや樽さいそくやめてもらい鯛
富第一にすられ樽入銀もどしてもらい鯛
（朔立）さたつて頭取いたし鯛百姓静まり御目出鯛

以上

献立

長盆　丼御倹約のため末ゝ水な
同御家老方ゝ馬鹿のあひもの
諸色御勘渡追ゝへりがい
百姓ゝ御返答をきくらげ
閉戸之者ゝ御詮儀を松茸
替られた役人のむねとうづはんべひ

大平

鉢肴　此度の御さばきゝ世上の人かあらいすゞき

小蓋茶碗　内藤の御かぎも揚出し御心入の人もじ

吸物　取込だ安藤追付御きわめが花ゆず

酒　非役の諸士いたみ諸向

本膳

代官ゝ百姓切身

汁　内藤ゝ御役御取あげで
根心も御欲とひずり

薄板　半知の重ね
証人のそぼろ
御家老ゝどふもいわ茸
女房取られてしほくのり
此さばきをいつかきつか

飯　奥組ゝ家元ゝあつけめし
取込た役人ゝ追付御咎こおふき蓮

平皿　内輪評定ゝ東芋（つがいも）
奥組之駕廻しゝ相生かまぼこ
ぬるい事て盗人が夕□

千代口　此お治りゝどふせうがず
御住居と砂村ゝ御金ゝ入酒

小皿　のどをほしうり
御当職ゝ百姓一揆で味噌つけ

引而　御評定も長ひじき
代官衆ゝ御差操の鮎のとふずし
御当職ゝ腹をきるゝおふ板かまぼこ
御所帯ゝ上の御金で家をかふ茸
布施のふで迷惑するゝ寺の午房

都合人も御湯
御所帯ゝ肝をうで玉子

蓋　百姓ゝ悪口をいゝだこ
御さいきよ末婦らんきよ
御所帯ゝかわ午房
願の筋鰯から漬
御蔵本ゝまてがい
砂村へ金をまきのり

吸物　御恵ミゝあかへい

御菓子　おためごかして取込んでおくり野
上の御金でひちをかすてら

茶　札銀を引かへて取組んだ山吹

以上

下ノ分

丼　御所帯ゝあいもの

鉢肴　諸郡大こんらん
御蔵元ゝぬたあへ

鉢　産物方ゝあぶつた鯖
なんとすりせうが

飯　出張の衆ゝあせをにぎりめし

酒　取込んだ役人かゞられて君が井イ

以上

諸色　高砂

諷　此治りゝ治りゝどふせう〳〵

御家老ゝ女房さるまつ

(D)(天保二年)十月十六日晴天

番組

一、御内用から一揆が　翁
一、こまいものゝ　氷室
一、両国騒動の咄ゝ　千歳
一、御家中ゝ沖中の　浮舟
一、中関がこわしの　三番叟
一、取こんむ役人ゝ　木賊
一、諸しきゝ　高砂
一、表をはる役人ゝ　舎利
一、町人ゝ　吉野静（狐々）せう〳〵
一、御上の御心ゝ　乱
一、両国の百姓ゝ　同材
一、起りを詮儀すれゝ皆　感陽子
一、御政道か　車僧
一、大勢打よつて　頼政
一、村〻鐘をついて　心腹
一、悪党ゝ時節を　夜打曾我
一、盗人ましりに　百万（接待）せつたい
一、一揆の人数ゝ誠こ　京漬
一、にぎり飯と酒の　巻絹
一、鍋を茶碗も皆　老松
一、銭も金も皆　三井寺
一、逃る代官百姓が　あふむ小野（鶯鶯）（鍛冶）
一、ケ様の事ゝ始て　小かじ
一、にくまれてこんなに　金札
一、こわしのくゝしゝ　かんたん（邯鄲）
一、おしい事ゝ捨られた　小野（龍）
一、御祈願所こてくだく　たつ田
一、飛脚ゝ本物ゝ通ひ　紅葉狩
一、こわされて腹ゝ　弱法師（ヨワホウシ）
一、御沙汰所ゝ気を　蟻通
一、両職の腰ゝ
一、不慮の沙汰が

一、道松きれとの御沙汰ゝ　国柄
一、願が有るなら　誓願寺
一、百姓口を捨（捌）て　夕貌（顔）
一、越た願も　融
一、無理な御沙汰ゝ　唐舟
一、お国の恥ゝ他国へ　杜若
一、御代官のしりゝ　敦盛
一、お物入に跡腹ゝ　関原与市
一、御所帯ゝなんと　照君（阿漕）あこぎ
一、こわしもあまり　嵐山
一、内福の所ゝ不残　隈田川
一、こわす所ゝ最早　松生
一、百姓願ひの御返答を　常陸帯
一、御詮儀に　籠太鼓
一、咎人ゝ追〻　藤
一、御国中にお恵ゝ　忠信
一、御発（翠）かゝ　松風
一、諷〻この声も　鶴亀
一、両国治りて　棒しばり
狂言　物まね
一　柊て岩見（屋）やを　八幡前
一、百姓ゝ神器陣を　靱猿
一、山口勢様ゝ　鬼瓦
一、百姓を鉄砲て　かくれミの
一、屋根からなける　粟田口
一、代官ゝ命から〳〵　首引
一、即興せつゝこんなめに　不聞座頭
一、一揆頭取と盗た役人ゝ　居枕
一、代官のいふ事ゝ　花子
一、加州の　柿山伏
一、当職手元ゝまた　たぬき
一、腰ぬけ沙汰て恥を　松納
一、さをきを（騒）江戸ゝ隠し
一、御静謐を